

中村武羅夫

泉鏡花氏



泉

鏡花氏



三月の中旬、春の日の暖かい或る日の午後、逗子に泉鏡花氏を訪うた。停車場からももの五丁も行って左りに曲り、少し行った直ぐ其左側に鏡花氏の寓はある。二軒つづきの二階建、向って右がそれである。格子戸を開けて案内を乞うと、言葉で直ぐそれと領むづかれる露むき出しの金沢弁の書生が取り次に出た。

茶の間を通って二階に通される。二階は六畳の二間になつて、入った直ぐは寢室らしく、其次の東南の廻窓に

なった、明るい六畳が鏡花氏の書斎である。不断執筆される机は小さい経机で、その上には校正刷の紙が載って居た。左りの方に大きい机が置かれて、上には本などが置いてある。床にはあっさりした一軸が懸って、紅葉全集が六冊、箱に入った儘綺麗に並べられた。

そして、室の中に置れた本箱の上に、紅葉氏の写真が飾ってある。自分はそれを見て、鏡花氏が如何に其師匠紅葉氏を想うの念篤きかを思い、床しく懐しく感じた。

先ず初対面の挨拶をする。自分は鏡花氏を会わない以前に想像して、非常に気難しい、尊大な人のように思っ

ていたが、会って見ると、何うして極く気軽な、隔てのない、中々愛想の好い人である。今迄昼寝をして居られたものと見えて、黄色っぽい寝衣をはおつて居られたが、其所に脱いであつた黒い紋付の羽織に着更えられた。背は高くない、どちらかと云うと小作りの方で、髪を少し長く刈り、目立たないように分けられた。色の白い一体に脾弱そうな顔で、唇は思い切つて締り、目元から鼻の工合、男のいかつい部分は割りに少なく、女々しく俏に出来て居る、金縁の近眼鏡を掛けて、着物は艶のあるのを着られたが、少しもにやけた厭や味な様子はない。ど



ちらかと云うと、商人風の勝った、極く真面目な人からである。お顔を一目見ると、如何にも神経質で、成る程ああした思想の作を書かれるのも尤もであると頷かれる。声は涼しいハッキリした声だが、其声には男らしい響と力がない。お話は余り上手でない。殊に議論は得意でないらしい。色々なお話を伺って居る中に、鏡花氏の思想が、現代というものに没交渉であることが分った。鏡花氏の作物に依って、現代の苦がい、苦しい、暗い色に触れることが出来ないように——鏡花氏の作物に全然現代と云うものが閑却されて、現代と無交渉なる夢のよ



うな空想が描かれて居ると同じように、鏡花氏の胸は現代思潮の陰鬱な暗い毒々しい気に触れて居ない。其鏡花氏にして初めてああした作物を描くことが出来るのだ。

鏡花氏の作物が現代に根底を置かず、現代思潮と没交渉なように、鏡花氏の人物乃至思想其物が現代の思潮に触れて居ないのだ。其趣味嗜好は全然江戸時代の文学——所謂江戸趣味によって養われて居る。その思想は紅葉時代の美とか通とかを喜んだ思想に全然固められて居る。斯うした趣味嗜好を有し、斯うした思想に固められた鏡花氏の作物に、現代と云うものが無視——と云うと語弊

があるが、閑却されて居るのは余儀ない事実である。当然の事である。

神秘も好き。空想も好き。が、其神秘や空想や必らず現代と云うことを無視してはならぬ。現代を無視した

——無視しない迄も閑却した文芸は、現代に於ける生命の無い文芸である。鏡花氏の文芸がそれだ。神秘の底、空想の中に、現代思潮の片影でも流して欲しい。あの技巧、あの空想を有しながら、惜しいことに鏡花氏は現代を閑却して居る。鏡花氏にして今少し現代を尊重し、現代の思潮に触れるように努め、そして、現代に根底を置

いて、ああした神秘、ああした空想を描かれたら、其作品は必らずや、今の鏡花氏の作品の如く無意味なものではあるまい。お伽噺的のものではあるまい。あの技巧、あの空想を有しながら、現代を閑却してるのは、惜しいことである。返す返すも惜しいことである。

話をしながら能く煙草を吸われる。お茶を飲まれる。其態度に落着がない。ずつしりと重々しい所がない。で、些つと会ったばかりの時は、其人物を実に軽々しく見せる。軽佻に見せる。江戸趣味、江戸趣味と云うと、吾人は何故か戯作者を連想する。鏡花氏の人物が何となく

軽々しく見えたのは、之れも要するに其江戸趣味から来たのではあるまいかと思つた。

兎に角く鏡花氏は、想像とは全然相反した人であつた。





日本文学電子図書館

---

現代文士廿八人

著 者：中村武羅夫

制作者：宮澤一郎

出版社：日高有倫堂

明治42年7月10日 印刷

明治42年7月16日 発行

---



日本文学電子図書館